パーリ語の物語における現在時制と過去時制

稲　葉　維　摩

1. はじめに

本論文はパーリ語の物語（narrative）における現在時制と過去時制の振る舞いを検討する。歴史的な点から，パーリ語の現在時制の定動詞は直説法現在，過去時制の定動詞はアオリストと呼ばれることもある。稲葉（2019）ではそれらの名称を用いたのだが，本論文では直説法現在を現在形，アオリストを過去形と呼ぶことにする。

稲葉（2019）は，直接話法を使ってパーリ語の現在形と過去形の基本的な意味と関係を調べた。本論文は，その現在形と過去形が物語の語り（narration）においてどのように機能しているかを調べる。

語りでは，物語の筋を前進させる前景（foreground）と，筋の前進を伴わない状況説明や場面の解説などの背景（background）とが区別される。両者の区別の仕方は言語によって異なる。本論文は，パーリ語が時制によって前景と背景を区別していることを述べる。すなわち，パーリ語では過去形が前景を，現在形が背景を表す。

2. 前景と背景

時制とは基本的に，動詞が表す事柄の時間を発話時に関連付けて示す文法カテゴリーなのだが，語りではこの機能が異なる。語りでは，物語の中心的な筋を進めていくために，事柄を順に述べていきながら連続した場面を語っていく。この事柄を連続して述べる継起性が，語りにおける時制の基本的な性質である（Comrie 1985，工藤 1995 など）。継起性をもとにして，語りでは前景と背景が区

別される。継起性を持って中心的な筋が進められていくことを前景という[(1)]。また，語りには，中心的な筋の他に，周辺的な事柄や同時進行の事柄，状況説明や解説，要約などがある。これらのことを背景という。前景は物語の骨格，背景は肉付けに喩えられる。前景と背景の表し方は言語によって異なり，アスペクトや時制の形式，接辞，語順，態などによる区別の仕方がある（Hopper 1979ab, 1982, Hopper & Thompson 1980 : 280–294 など）。

物語論（narratology）などでは，この区別のあいまいさが指摘され，別の研究方法や視点が取られているけれども（Fleischman 1990, Carruthers 2012, Fludernik 2012），本論文では稲葉（2019）に続き，パーリ語の時制の基礎的な研究として，現在形と過去形の主な関係を明らかにしておきたい。そのため，本論文は語りにおける前景と背景の区別という点に留まって論ずる。

3. 先行研究と本論文の立場

パーリ語の時制に関する先行研究については稲葉（2019）に管見の限りをまとめたが，特に本論文に関係するものだけ，再び取り上げておく。

Hendriksen（1944）はパーリ語の非定形動詞の研究だが，過去受動分詞（Hendriksen 1944 では “perfect passive participle” と呼ばれる）を扱う中で定動詞を取り上げ，物語における定動詞の過去形と非定形動詞の過去受動分詞について論じている。Hendriksen（1944）は，定動詞の過去形を現在に関わらない過去のことを述べる “pure past” とし，物語における基本の動詞だと述べる。対して，過去受動分詞は現在との関連で過去の事柄を述べる “present-past” とし，過去形にはない様々な用法を検討している。また，“present-past” という点から，過去受動分詞を歴史的現在の現在形と同質のものと見ている[(2)]。

過去形に対する Hendriksen（1944）の指摘は，本論文で述べる語りの前景に相当すると言えるのだが，過去形と現在形に関する Hendriksen（1944）の理解は従来通りの見方に従ったものだった。これに対して，本論文は，稲葉（2019）で述べた現在時制と過去時制の基本的な体系に基づいて，語りの中で過去形と現在形が作る関係を明らかにする。

Bechert（1958）はパーリ語の直説法を取る過去・現在・未来時制について論じた。この中，過去を表す現在形が imperfective，過去形が perfective のアスペクト[(3)]を区別していると述べる。しかし，パーリ語には時制の区別はあるが，アスペクトの区別はない。アスペクトの区別に見えたものは，語りにおける前景と背景の区別だったと考えられる。このことは本論文の 5.2. で論ずる。

Gotō（2000: 265–267），後藤（2017: 55–58）は，古期インド・アーリヤ語[(4)]で，過去を指す副詞や不変化詞 sma と共起する直説法現在が「過去の繰り返し」を表すことを取り上げる[(5)]。その中で，パーリ語について次のことが述べられている。この「過去の繰り返し」を表す用法は口語的な語りの反映であり，パーリ語経典の冒頭「evam me sutam. ekaṃ samayaṃ bhagavā ...（地名，例えば sāvatthiyaṃ）viharati『そのように，私は聞いた。ある時，世尊は（Sāvatthi に）滞在している／いた』; tena kho pana samayena『その［同じ］時，他方，…のだ』」（後藤　2017: 58）に現れている。この冒頭に対応するサンスクリット語の文「evaṃ mayā śrutam ekasmiṃ samaye bhagavān (śrāvastyāṃ) viharati sma」（後藤 2017: 58）では，sma が直説法現在と共起しているのだが，この sma の付加は，ekasmiṃ samaye「ある時」が文末として再解釈されたためである[(6)]。

この過去を表す現在形について，稲葉（2019）は，パーリ語の現在形の基本的意味が不定であり，副詞や文脈によって過去の表現に関わること，そして過去形との対立から，現在形が過去の習慣，継続，反復の意味を表すことを述べた。しかし，発話時を基準とする直接話法と語りでは時制の機能が異なる。そのため，稲葉（2019）では研究対象として直接話法を用い，Gotō（2000），後藤（2017）があげるような経典の冒頭は扱わなかった。経典の冒頭は語りだからである。本論文では，経典の冒頭も含めた語りを対象にして，前景と背景の区別という視点から，現在形と過去形の関係を見ていく。

4. 使用するテキスト

本論文が扱ったテキストは稲葉（2019）と同じく Dīghanikāya (D), Majjhimanikāya (M), Saṃyuttanikāya (S), Aṅguttaranikāya (A) だが，本論文に引用した例文は主に

D,M からになった。D,M には様々な長編の物語が収録されている。一方，S は教義の主題ごとに比較的短い話をまとめたものであり，A は項目の数ごとにまとめたものである。このような文献の性格から，S,A の語りは基本的に D,M と同じものになっている。そのため，典型的な例についても特殊な例についても，D,M を見ることで残りの文献にも共通の理解が得られる。テキストの概要については稲葉（2019）を参照されたい。

5. 語りにおける現在時制と過去時制

5.1. 前景と背景の基本的な区別

語りにおける前景と背景の区別を見ていく前に，稲葉（2019）で述べた時制の基本的な関係を確認しておく。この関係をもとにして前景と背景の区別が生まれるからである。

現在形は，基本的に意味が不定であり，共起する副詞や文脈によって具体的な用法が生まれる無標の形式である。これに対して，過去形は過去を表す有標の形式である。現在形も副詞や文脈によっては過去を表すのだが，その際には過去形との棲み分けが生まれ，現在形は過去の習慣，継続，反復の意味を表す。

このことを踏まえた上で，例文を見ていこう。例文の引用では原文，和訳ともに現在形を下線，過去形を下線とボールド体，その他注意する語を適宜ボールド体で示した。(7)

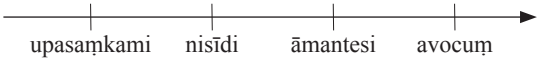
まず，過去形を見てみる。過去形は語りの基本と言える時制である。(1)はパーリ語の典型的な語りで，ブッダと比丘達の行動を順に述べている。順に述べることで，筋や場面が進んでいく。先立つ事柄がなければ次の事柄は成り立たないし，また，それぞれの事柄の継続や具体性などは問題になっていない。

(1) D I 2 atha kho bhagavā tesaṃ bhikkhūnaṃ imaṃ saṅkhiyādhammaṃ viditvā yena maṇḍalamālo ten' **upasaṃkami**. upasaṃkamitvā paññatte āsane **nisīdi**. nisajja kho bhagavā bhikkhū **āmantesi**. kāya nu 'ttha bhikkhave etarahi kathāya sannisinnā. kā ca pana vo antarākathā vippakatā ti. evaṃ vutte te bhikkhū bhagavantaṃ etad **avocuṃ**.「さて，世尊はかの比丘達のこの話題を知って，

円形講堂に**向かった**。向かってから，用意された席に**座った**。座ってから，世尊は比丘達に**話しかけた**。『一体ここで，比丘達よ，今，何の話しで集まっているのか。そしてまた，君達は何の会話を中断したのか』と。このように言われて，かの比丘達は世尊に次のことを**言った**」。

このことを図示してみると，(2)のようになるだろう。矢印の方向に物語が進んでいく。

(2)



このように，過去形は事柄を継起させて，物語の筋や場面を前に進める前景を表している。いわゆる叙事的過去（epic preterite）である。稲葉（2019）ではパーリ語の過去形が anterior の意味を表すことを述べたが[8]，過去形が前景を表すということを踏まえると，anterior は過去形の基本的な意味ではなく，解釈から生じるものだということがわかる。anterior では基準となる時点が過去でなく発話時にあるので，過去の事柄も何らかの点で発話時と関連する。そのため，anterior は継起性を表せず，語りに使うことができない（Kiparsky 1998 など）。一方，過去という意味は，anterior のような発話時との関連を持たずに，ただ発話時より前のことを述べるだけである。そのため，事柄の継起を表すことができる。ここで見た通り，パーリ語の過去形は事柄を順次並べて，物語を進めていく継起性を持っている。それ故，物語を進める時制である過去形は，anterior でなく，過去が基本的意味であると理解することができる。

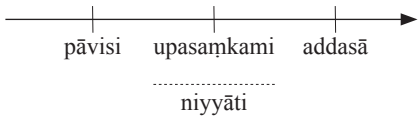
次に現在形を見てみよう。(3)も典型的な語りである。サーヴァッティに向かう王が高楼に向かう途中のアーナンダを見かけるという内容である。ここでは，現在形 niyyāti「出かける」(3 人称単数）が過去形とともに使われている。先に述べたように，現在形は過去の習慣，継続，反復を表すので，(3)の現在形も継続中の事柄を表していると理解できるのだが，ここでは過去形との関係から生まれる場面の構成に注目しよう。この現在形で言われる事柄は，過去形で言われる事柄のうしろで続いている。つまり，アーナンダが高楼に向かった

時，すでに王は出かけている最中だったのである。王が出かけていることは，時制が現在形であることの他に，divādivassa「早朝」という時間が言われていることからもわかるだろう（アーナンダが高楼に向かったのはそれより遅い）。また，同じ文にある前方照応の時間指示 tena samayena「その時」は，アーナンダが托鉢を終えて高楼に向かった時を指している。

(3) M II 112 atha kho āyasmā ānando pubbaṇhasamayaṃ nivāsetvā pattacīvaraṃ ādāya sāvatthiṃ piṇḍāya **pāvisi**. sāvatthiyaṃ piṇḍāya caritvā pacchābhattam piṇḍapātapaṭikkanto yena pubbārāmo migāramātu pāsādo ten' **upasaṃkami** divāvihārāya. **tena** kho pana **samayena** rājā pasenadi kosalo ekapuṇḍarīkaṃ nāgaṃ abhirūhitvā sāvatthiyā niyyāti **divādivassa**. **addasā** kho rājā pasenadi kosalo āyasmantaṃ ānandaṃ dūrato va āgacchantaṃ.「さて，長寿なる者アーナンダは午前中に衣を着て，鉢と衣を取り，托鉢のためサーヴァッティに**入った**。サーヴァッティで托鉢をして，食後に托鉢から戻ってくると，日中を過ごすために，高楼プッバーラーマ・ミガーラマートゥの所に**向かった**。また**その時**，パセーナディ・コーサラ王は一頭の白い象に乗って，**早朝**，サーヴァッティに出かけていた。パセーナディ・コーサラ王は長寿なる者アーナンダが遠くからやって来るのを**見た**」。

このことを (4) に図示してみる。現在形が表す事柄を点線で示した。現在形 niyyāti が過去形 upasaṃkami の背景になっていることがわかる。

(4)



もう一つ例を見ておこう。(5)は，サーリプッタと牛の乳搾りをしているダーナンジャーニ・ブラーフマナが会う場面である。2 人の一連の行動は過去形だが，ダーナンジャーニの乳搾りは現在形である。ここでも前方照応の tena samayena「その時」が使われていて，サーリプッタがラージャガハに入った時点を指している。ダーナンジャーニ・ブラーフマナはその間，乳搾りを続けて

いて，サーリプッタがラージャガハに入ったということの背景になっている。

(5) M II 185–186 atha kho āyasmā sāriputto pubbaṇhasamayaṃ nivāsetvā pattacīvaraṃ ādāya rājagahaṃ piṇḍāya **pāvisi**. **tena** kho pana **samayena** dhānañjāni brāhmaṇo bahi nagare gāvo goṭṭhe dohāpeti. atha kho āyasmā sāriputto rājagahe piṇḍāya caritvā pacchābhattaṃ piṇḍapātapaṭikkanto yena dhānañjāni brāhmaṇo ten' **upasaṃkami**. **addasā** kho dhānañjāni brāhmaṇo āyasmantaṃ sāriputtaṃ dūrato va āgacchantaṃ. disvāna yen' āyasmā sāriputto ten' **upasaṃkami**. upasaṃkamitvā āyasmantaṃ sāriputtaṃ etad **avoca**. ito bho sāriputta payo pīyataṃ. tāva bhattassa kālo bhavissatī ti.「そこで，長寿なる者サーリプッタは午前中に衣を着て，鉢と衣を取って，托鉢のためラージャガハに**入った**。また**その時**，ダーナンジャーニ・ブラーフマナは都城の外の牛舎で牛達の乳を搾っていた。そこで，長寿なる者サーリプッタはラージャガハで托鉢をして，食後に托鉢から戻ってくると，ダーナンジャーニ・ブラーフマナのところへ**向かった**。ダーナンジャーニ・ブラーフマナは長寿なる者サーリプッタが遠くからやってくるのを**見た**。見てから，長寿なる者サーリプッタのところに**向かった**。向かってから，長寿なる者サーリプッタに次のことを**言った**。『サーリプッタ殿，こちらで牛乳をお飲みください。その内，食事の時間になりますよ』と」。

過去形と現在形から生まれるこの違いが，語りにおける前景と背景の区別である。過去形は物語の筋や場面を前進させる前景を表し，現在形は同時進行の事柄などの背景を表している。両方の時制を用いることで，複合的な場面が作り出される。

なお，背景を表す現在形の文には，しばしば不変化詞 sudaṃ が現れる。sudaṃ は古期インド・アーリヤ語の sma tad が音変化したものと考えられている（Hinüber 2001: §134）。3. でふれたように，sma は直説法現在と共起して「過去の繰り返し」を表すと言われている。パーリ語の sudaṃ も現在形とともに現れることが多いので sma と同じように見えるが，これまでに述べているように，

パーリ語の現在形は，過去形との関係で過去の習慣，継続，反復を表し，語りにおいては背景を表す。従って，sudaṃ は現在形が過去を表すための必須の語ではないと考えられる。[9]

5.2. アスペクトの区別に見えたもの

以上に，典型的な語りを用いて過去形が前景を，現在形が背景を表していることを見た。このことを踏まえた上で，Bechert（1958）に言われるアスペクトの問題を検証したい。3. で紹介したように，Bechert（1958）は現在形が imperfective，過去形が perfective のアスペクトを区別していると考える。しかし，稲葉（2019）で述べたように，パーリ語の現在形と過去形はアスペクトを区別する形式とは言えない。では，Bechert（1958）の言う両者の違いとは何だろうか。それは語りにおける前景と背景の違いだと考えられる。

Bechert（1958）が明確なアスペクトの対比として言及する例を見てみよう。(6)では現在形 upasaṃkamanti「向かう」（3 人称複数），(7)では同じ動詞の過去形 upasaṃkamiṃsu（3 人称複数）が使われている。Bechert（1958: 57）によれば，(6)の upasaṃkamanti が imperfective，(7)の upasaṃkamiṃsu が perfective である。なお，Bechert（1958: 57）は前後の文をあげていないが，それこそが重要であるため，ここでは前後の文も含めて引用した。

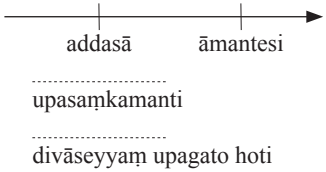
(6) D I 112 atha kho campeyyakā brāhmaṇagahapatikā campāyaṃ nikkhamitvā saṃghā saṃghī gaṇībhūtā yena gaggarā pokkharaṇī ten' upasaṃkamanti. tena kho pana samayena soṇadaṇḍo brāhmaṇo uparipāsāde divāseyyaṃ upagato hoti. **addasā** kho soṇadaṇḍo brāhmaṇo campeyyake brāhmaṇagahapatike campāya nikkhamitvā saṃghā saṃghī gaṇībhūte yena gaggarā pokkharaṇī ten' upasaṃkamante. disvā khattaṃ **āmantesi**.「さて，チャンパーに住むブラーフマナ達，家長達はチャンパーを出発し，集団から集団になり，団体になって，蓮池ガッガラーに向かっていた。またその時，ソーナダンダ・ブラーフマナは高楼の上で昼寝に入っていた。ソーナダンダ・ブラーフマナは，チャンパーに住むブラーフマナ達，家長達がチャンパーを出発し，集団から集団になり，団体

になって，蓮池ガッガラーに向かっていくのを**見た**。見てから従者を**呼んだ**」。

(7) D I 113 **assosuṃ** kho te brāhmaṇā. soṇadaṇḍo kira brāhmaṇo samaṇaṃ gotamaṃ dassanāya upasaṃkamissatī ti. atha kho te brāhmaṇā yena soṇadaṇḍo brāhmaṇo ten' **upasaṃkamiṃsu**. upasaṃkamitvā soṇadaṇḍaṃ brāhmaṇaṃ etad **avocuṃ**.「かのブラーフマナ達は**聞いた**。『ソーナダンダ・ブラーフマナが沙門ゴータマに会いに行こうとしているそうだ』と。そこで，かのブラーフマナ達はソーナダンダ・ブラーフマナのところに**向かった**。向かってから，ソーナダンダ・ブラーフマナに次のことを**言った**」。

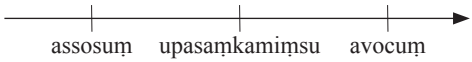
(6)，(7)はこれまでに見た例と同様，典型的な語りである。(6)の現在形 upasaṃkamanti は，次の文で言われる昼寝（divāseyyaṃ upagato hoti）と同時進行である。その次の文では，人々が大勢でガッガラーという名の蓮池に行くのをソーナダンダ・ブラーフマナが見た，ということが過去形で言われる。この場面は，ブラーフマナ達や家長達がガッガラーに向かう途中であり，かつソーナダンダが高楼で昼寝をしている最中でのことである。つまり，upasaṃkamanti は昼寝とともに過去形「見た」の背景になっている。(6)を図示しておこう。

(8)



一方，(7)の過去形 assosuṃ「聞いた」，upasaṃkamiṃsu，avocuṃ「言った」は，一連の動作を順番に並べているだけである。同時に継続する事柄や具体的なことは何も言われておらず，前景だけが表されている。

(9)



以上のことから，(6)の現在形 upasaṃkamanti は背景，(7)の過去形 upasaṃkamiṃsu は前景を表していることがわかった。アスペクトの区別のように見えた両者の違いは，語りにおける前景と背景の区別である。

Bechert（1958: 56–57）があげる他の例も見ておこう。(10)の現在形 hananti「打つ」(3 人称複数)，(11)の viharāmi「過ごす」(1 人称単数)，caṃkamāmi「そぞろ歩きする」(同）を取り上げているが，前後の文とともに見ると，どちらもこれまでに見たような背景である。(10)では，ブッダがアナータピンディカの園に過ごしていて，同時に子供達が蛇を棒で叩いているという場面の上で，托鉢に出かけたことが過去形で言われる。(11)では，ブッダがそぞろ歩きをしている最中に，人々が雷に打たれた農夫達のところへ向かう場面が描かれている。

(10) Ud 11 evam me sutaṃ. ekaṃ samayaṃ bhagavā sāvatthiyaṃ viharati jetavane anāthapiṇḍikass' ārāme. tena kho pana samayena sambahulā kumārakā antarā ca sāvatthiṃ antarā ca jetavaraṃ ahiṃ daṇḍena hananti. atha kho bhagavā pubbaṇhasamayaṃ nivāsetvā pattacīvaram ādāya sāvatthiṃ piṇḍāya **pāvisi**.「このように私は聞いている。ある時，世尊はサーヴァッティ，ジェータヴァナのアナータピンディカの園に過ごしていた。またその時，サーヴァッティとジェータヴァナの間で多くの子供達が蛇を棒で叩いていた。さて，世尊は午前中に衣を着て，鉢と衣を取って，托鉢のためサーヴァッティに**入った**」。

(11) D II 131 ekaṃ idāhaṃ pukkusa samayaṃ ātumāyaṃ viharāmi bhusāgāre. tena kho pana samayena deve vassante deve gaḷagaḷāyante vijjutāsu niccharantīsu asaniyā phalantiyā bhusāgārassa dve kassakā bhātaro hatā cattāro ca balivaddā. atha kho pukkusa ātumāya mahājanakāyo nikkhamitvā yena te dve kassakā bhātaro hatā cattāro ca balivaddā ten' **upasaṃkami**. tena kho panāhaṃ pukkusa samayena bhusāgārā nikkhamitvā bhusāgāradvāre abbhokāse caṃkamāmi.「プックサよ，ある時，私はアートゥマーにある脱穀小屋で過ごしていた。また

その時，空は雨が降り，ゴロゴロ鳴り，稲光が走り，稲妻が砕けているところで，脱穀小屋の 2 人の農夫の兄弟と 4 頭の牛が〔雷に〕打たれた。そこで，プックサよ，大勢の人々の集まりはアートゥマーから出て，〔雷に〕打たれたその 2 人の農夫の兄弟と 4 頭の牛のところに**向かった**。一方その時，プックサよ，私は脱穀小屋から出て，脱穀小屋の扉の空き地でそぞろ歩きしていた」。

また，Bechert（1958）は，成立年代の新しい文献では現在形が期待される所に過去形が使われると述べて，（12）の過去形 vasiṃsu「滞在した」と（13）の現在形 kāreti「する」（rajjaṃ kāreti「王権を行使する」）を対比させている。しかし，物語ごとに時制が異なるのは，何を前景とし，何を背景として語るかのその都度の違いと言える。

（12）Ja-a V 37 atīte himavati chaddantadahaṃ upanissāya aṭṭhasahassā hatthināgā **vasiṃsu** iddhimanto vehāsayaṃgamā. tadā bodhisatto jeṭṭhakavāraṇassa putto hutvā **nibbatti**. so sabbaseto **ahosi** rattamukhapādo.「昔，ヒマヴァントのチャッダンタ湖に身を寄せて，神通力を備え，空を飛ぶ，八千頭の象達が**滞在した**。その時，菩薩は年長の象の子供となって**転生した**。彼は全身が白く，顔と足だけが赤く**なった**」。

（13）Ja-a V 57[10] atīte pana kururaṭṭhe indapattanagare dhanañjayakorabyo nāma rajjaṃ kāreti. tassa sucīrato nāma brāhmaṇo purohito atthadhammānusāsako **ahosi.** rājā dānādīni puññāni karonto dhammena rajjaṃ **anusāsi**.「また昔，クルラッタの都城インダパッタで，ダナンジャヤコーラビャという者が王権を行使していた。彼には，スチーラタという名のブラーフマナ，実利とダンマを教える筆頭祭官が**いた**。王は布施を初めとする福徳を作りながら，ダンマによって王国を**統治した**」。

なお，Bechert（1958）には省略された引用がある。（14）の現在形 homi「なる，

である」（1 人称単数）が取り上げられているのだが，（14）の通り，実際には homi の節は従属節で，主節の定動詞は過去形 vicintayiṃ「考えた」（1 人称単数）である。従属節の時制は主節と関わることで時間が決まる。この時制を相対時制（relative tense）という（Comrie 1985）。これも時制の問題であり，アスペクトとは関わらない。

(14) Ja VI 486 v. 1701 yadāhaṃ dārako homi | jātiyā aṭṭhavassiko /
tadā nisajja pāsāde | dānaṃ dātuṃ **vicintayiṃ** //
「私が生まれてから 8 歳の子供だった時，
高楼に座って，布施することを**考えた**」。

5.3. 背景の多様性

背景には，前景と同時進行の事柄を表す他，状況説明や解説など多くの使われ方がある。このことについて色々な例を見ていこう。なお，前景を表す過去形はここで述べるような使われ方をしない。

現在形は，経の冒頭で典型的な文句とともに物語の舞台を設定する。ブッダがいつ，どこに，誰といたのかが言われる。この形式を持つものが伝統的に仏教経典として認められる。

（15）D I 47 evam me sutaṃ. ekaṃ samayaṃ bhagavā rājagahe viharati jīvakassa komārabhaccassa ambavane mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ aḍḍhatelasehi bhikkhusatehi.「このように私は聞いている。ある時，世尊は王子の養育係ジーヴァカのマンゴー園に，多くの比丘サンガ，千二百五十人の比丘達とともに過ごしていた」。

（16）は，ブッダの入滅の場面で，沙羅双樹の間に横たわったところである。その時，季節外れの花々や栴檀の粉が降り注いだ。その様子を現在形で語っている。同じ動詞で接頭辞の異なる okiranti「覆う」（3 人称複数），ajjhokiranti「覆い隠す」（同），abhippakiranti「覆い尽くす」（同）が並んでいて，次々と絶え間なく降り注ぐ情景が読み取れる。さらに，天に鳴り渡る楽器の演奏や合唱

も現在形で言われる。(16)は，多く事柄を重ね合わることで，1つの重層的な場面を作り出している。

(16) D II 137–138 tena kho pana samayena yamakasālā sabbaphāliphullā honti akālapupphehi. te tathāgatassa sarīraṃ okiranti ajjhokiranti abhippakiranti tathāgatassa pūjāya. dibbāni pi mandāravapupphāni antalikkhā papatanti. tāni tathāgatassa sarīraṃ okiranti ajjhokiranti abhippakiranti tathāgatassa pūjāya. dibbāni pi candanacuṇṇāni antalikkhā papatanti. tāni tathāgatassa sarīraṃ okiranti ajjhokiranti abhippakiranti tathāgatassa pūjāya. dibbāni pi turiyāni antalikkhe vajjenti tathāgatassa pūjāya. dibbāni pi saṅgītāni antalikkhe vattanti tathāgatassa pūjāya.「けれどもその時，沙羅双樹が時ならぬ花を咲かせて満開になっていた。それらは如来の供養のために，如来の身体を覆い，覆い隠し，覆い尽くしていた。天のマンダーラヴァの花々も空中から降っていた。それらは如来の供養のために，如来の身体を覆い，覆い隠し，覆い尽くしていた。天の栴檀の粉も空中から降っていた。それらは如来の供養のために，如来の身体を覆い，覆い隠し，覆い尽くしていた。天の楽器も，如来の供養のために，空中で演奏されていた。天の合唱も，如来の供養のために，空中に沸き起こっていた」。

(17)はリッチャヴィという部族の人々が大勢でヴェーサーリーから出かける場面である。過去形 niyyiṃsu「出かけた」(3人称複数）の後に出てくる一連の現在形 honti「なる」(3人称複数）は，その時のリッチャヴィ達の色とりどりな姿を述べる，いわば解説である。

(17) D II 96 atha kho te licchavī bhaddāni bhaddāni yānāni yojāpetvā bhaddaṃ yānaṃ abhirūhitvā bhaddehi bhaddehi yānehi vesāliyā **niyyiṃsu**. tatr' ekacce licchavī nīlā honti nīlavaṇṇā nīlavatthā nīlālaṅkārā. ekacce licchavī pītā honti pītavaṇṇā pītavatthā pītālaṅkārā. ekacce licchavī lohitakā honti lohitavaṇṇā lohitavatthā lohitālaṅkārā. ekacce licchavī odātā honti odātavaṇṇā odātavatthā odātālaṅkārā.「そこで，彼らリッチャヴィ達は吉祥を次々もたらす乗り物

を繋げさせて，吉祥をもたらす乗り物に乗り，吉祥を次々もたらす乗り物でヴェーサーリーから**出かけた**。そこで，あるリッチャヴィ達は青くなっていた，青い肌で，青い衣服を着て，青い飾りをつけて。あるリッチャヴィ達は黄色くなっていた，黄色い肌で，黄色い衣服を着て，黄色い飾りをつけて。あるリッチャヴィ達は赤くなっていた，赤い肌で，赤い衣服を着て，赤い飾りをつけて。あるリッチャヴィ達は白くなっていた，白い肌で，白い衣服を着て，白い飾りをつけて」。

(18)は，ある娘が親戚達によって主人から引き離されるのを望まない場面である。語りを見ると，agamāsi「行った」(3 人称単数)，avoca「言った」(同) という実際の行動は過去形で言われている。それに対して，現在形 icchati「望む」(3 人称単数) は娘の心情を述べた解説である。娘は主人以外の人間と結婚することを望んでいない。それが娘の発言の動機になっている。

(18) M II 109 bhūtapubbaṃ brāhmaṇa imassā yeva sāvatthiyā aññatarā itthi ñātikulaṃ **agamāsi**. tassā te ñātakā sāmikaṃ acchinditvā aññassa dātukāmā. sā ca taṃ na icchati. atha kho sāvatthisāmikaṃ etad **avoca**. ime maṃ ayyaputta ñātakā taṃ acchinditvā aññassa dātukāmā. ahañ ca taṃ na icchāmī ti.「ブラーフマナよ，昔，他ならぬこのサーヴァッティのある娘が親戚の家に**行った**。その親戚達は彼女の主人を切り離して，〔彼女を〕他の者に与えようと思っていた。けれども彼女はそのことを望んでいなかった。そこでサーヴァッティの主人に次のことを**言った**。『あなた，この親族達はあなたを切り離して，私を他の者に与えようとしています。けれども私はそんなことを望んでいません』と」。

(19)は，ブッダが鍛冶屋の息子チュンダに施された食事を食べたことで重い病気にかかる場面である。発病が過去形 uppajji「起こった」で言われる。それに続く現在形 vattanti「生じる」は，病状の具体的な説明である。

(19) D II 127–128 atha kho bhagavato cundassa kammāraputtassa bhattaṃ

bhuttāvissa kharo ābādho **uppajji**. lohitapakkhandikā pabāḷhā vedanā vattanti māraṇantikā. tā sudaṃ bhagavā sato sampajāno **adhivāsesi** avihaññamāno.「さて，鍛冶屋の息子チュンダの食事を食べ終えた世尊に，激しい病気が**起こった**。血が飛び出る激しい，死に近い感覚が生じていた。世尊は記憶した状態で，正しい理解をしながら，傷つけられないでそれに**耐えた**[11]」。

(20) はヴィパッシン王子の養育の様子である。乳母達を王子に仕えさせたことが過去形 upaṭṭhāpesi「仕えさせた」(3 人称単数) で言われる。直後に乳を飲ませるなどの具体的な描写が続くが，これらは現在形で言われる。その後，白い傘をたてる場面では，再び過去形 dhārayittha「維持された」(受動 3 人称単数) に戻る。過去形は養育の項目を述べているのに対し，現在形は乳母達の世話の中身を具体的に示していて，過去形 upaṭṭhāpesi の内容を補足していると言える。

(20) D II 19 atha kho bhikkhave bandhumā rājā vipassissa kumārassa dhātiyo **upaṭṭhāpesi**. aññā sudaṃ pāyenti, aññā nahāpenti, aññā dhārenti, aññā aṅkena pariharanti. jātassa kho pana bhikkhave vipassissa kumārassa setacchattaṃ **dhārayittha** divā c' eva rattiñ ca, mā naṃ sītaṃ vā uṇhaṃ vā tiṇaṃ vā rajo vā ussāvo vā bādhā ti.「さて，比丘達よ，バンドゥマント王はヴィパッシン王子に乳母達を**仕えさせた**。ある者達は乳を飲ませ，ある者達は入浴させ，ある者達は支え，ある者達は腰で持ち運んでいた。また，比丘達よ，生まれたヴィパッシン王子のために白い傘が昼を通して夜の間も**維持された**，『冷たさや暑さや草やほこりや露が彼を悩ましてはいけない』と考えて」。

(21) は，比丘がある問題の答えをほうぼうに探し回ったが見つからず，結局ブッダの所に戻ってきた場面である。ブッダは昔話をあげて，その比丘を岸を見つける鳥に喩える。昔話は過去を指す副詞 bhūtapubbaṃ「昔」で始まり，現在形で語られる。ところがまもなく，昔話の途中で条件文 (sace「もし～なら」) が出てきて，それ以降は現実の話に戻っている。ここでは昔話を語るこ

とよりも，比喩の鳥を示すことに主眼を置いていると考えられる。従って，現在形で語られているのは，昔話そのものではなく，昔話のあらすじだと言える。

(21) D I 222–223 evaṃ vutte ahaṃ kevaddha taṃ bhikkhuṃ etad **avoca**. **bhūtapubbaṃ** bhikkhu sāmuddikā vāṇijā tīradassiṃ sakuṇaṃ gahetvā nāvāya samuddaṃ ajjhogāhanti. te atīradakkhiṇiyā nāvāya tīradassiṃ sakuṇaṃ muñcanti. so gacchat' eva puratthimaṃ disaṃ, gacchati dakkhiṇaṃ disaṃ, gacchati pacchimaṃ disaṃ, gacchati uttaraṃ disaṃ, gacchati uddhaṃ, gacchati anudisaṃ. **sace** so samantā tīraṃ passati tathā gatako va hoti. **sace** pana so samantā tīraṃ na passati, tam eva nāvaṃ pacchāgacchati. evam eva kho tvaṃ bhikkhu yāva yato yāva brahmalokā pariyesamāno imassa pañhassa veyyākaraṇaṃ n**ājjhagā**. atha maṃ yeva santike paccāgato.「このように言われた時，ケーヴァッダよ，私はその比丘に次のことを**言った**。『比丘よ，**昔**，海商達が岸を見つける鳥を捕まえて，船で海に繰り出していた。岸を見失った船から，彼らは岸を見つける鳥を放す。それ（鳥）は東の方角に行き，南の方角に行き，西の方角に行き，北の方角に行き，上に行き，その他の方角に行く。**もし**，それが周囲に岸を見る**ならば**，その通り，行ってしまったものになる。けれども**もし**，それが周囲に岸を見ない**ならば**，他ならぬその船に戻ってくる。まったく同様に，比丘よ，君は梵天界にまで探し回りながらも，この問いの答えに**たどり着かなかった**。そして他ならぬ私の前に戻ってきている』」。

6. まとめ

本論文は，前景と背景の区別という視点から，パーリ語の物語における過去形と現在形の振る舞いを検討した。過去形は事柄を継起させて物語の中心的な筋や場面を前に進める前景を表す。現在形はこの前景と同時進行の事柄や状況説明，解説，要約などの背景を表す。両者のこのような違いは，稲葉（2019）に見た現在形と過去形の基本的な関係によるものである。

・略号及び参考文献

D = Davids, T. W. Rhys and J. Estlin Carpenter. 1890–1911. *The Dīgha Nikāya*. 3 vols. London: Pali Text Society.

Ja, Ja-a = Fausbøll, Viggo. 1877–1896. *The Jātaka: Together with its Commentary, Being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha.* 6 vols. London: Trübner.

M = Trenckner, Vilhelm and Robert Chalmers. 1888–1925. *The Majjhima-Nikāya*. 4 vols. London: Pali Text Society.

Ps = Woods, James H., Dharmananda Kosambi, and Isaline B. Horner. 1922–1938. *Papañcasūdanī: Majjhimanikāyaṭṭhakathā of Buddhaghosâcariya.* 5 vols. London: Pali Text Society.

S = Feer, Léon M. 1884–1904. *Saṃyutta-Nikāya*. 6 vols. London: Pali Text Society.

Ud = Steinthal, Paul. 1885. *Udāna*. London: Pali Text Society.

Bechert, Heinz. 1958. Über den Gebrauch der indikativischen Tempora im Pāli. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 3: 55–72.

Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.

Carruthers, Janice. 2012. Discourse and Text. In Robert I. Binnick (ed.), *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*, 306–334. Oxford: Oxford University Press.

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.

———. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

Delbrück, Bertold. 1888. *Altindische Syntax*. Halle: Waisenhauses.

Fleischman, Suzanne. 1990. *Tense and Narrativity: From Medieval Performance to Modern Fiction*. Austin: University of Texas Press.

Fludernik, Monika. 2012. Narratology and Literary Linguistics. In Robert I. Binnick (ed.), *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*, 75–101. Oxford: Oxford University Press.

Gotō, Toshifumi. 2000. Zur Sprache der *Śvetāśvatara-Upaniṣad*. In Christine Chojnacki, Jens-Uwe Hartmann, and Volker M. Tschannerl (eds.), *Vividharatnakaraṇḍaka: Festgabe für Adelheid Mette*, 259–281. Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag.

Hendriksen, Hans. 1944. *Syntax of the Infinite Verb-forms of Pāli*. Copenhagen: Einar Munksgaard.

Hinüber, Oskar von. 2001. *Das ältere Mittelindisch im Überblick*, 2., erweiterte Auflage. Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Hopper, Paul J. 1979a. Some Observations on the Typology of Focus and Aspect in Narrative Language. *Studies in Language* 3(1): 37–64.

———. 1979b. Aspect and Foregrounding in Discourse. In Talmy Givón (ed.), *Syntax and Semantics* vol. 12: Discourse and Syntax, 213–241. San Diego; New York: Academic Press.

———. 1982. Aspect between Discourse and Grammar: An Introductory Essay for the Volume. In Paul J. Hopper (ed.), *Tense-Aspect: Between Semantics and Pragmatics*, 3–18. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson. 1980. Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56(2): 251–299.

Kiparsky, Paul. 1998. Aspect and Event Structure in Vedic. In Rajendra Singh (ed.), *The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics*, 29–61. New Dehli: Sage Publications.

Speijer, Jacob S. 1886. *Sanskrit Syntax*. Leiden: E.J. Brill.

稲葉維摩　2019「パーリ語の直説法現在とアオリスト」『佛教學セミナー』109：67–87.

工藤真由美　1995『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』　東京：ひつじ書房.

後藤敏文　2017「Śvetāśvatara-Upaniṣad の言語について」『国際仏教学大学院大学研究紀要』21: 45–90.

註

(1)　物語論では歴史的現在の機能に foregrounding「前景化」という名称が用いられる。この前景化は，時制を交替させることで主題や重要な事柄を前面に押し出したり，場面の展開を示したりすることである（Fleischman 1990, Carruthers 2012, Fludernik 2012）。本論文の「前景」は，この機能とは関係しない。

(2)　歴史的現在とは，過去の事柄を現在時制で言うことによって，過去の事柄をあたかも目の前で起こっているかのように生き生きと表現する仕方と言われている。最近では，歴史的現在は語用論や物語論で扱われる問題になっているので，パーリ語においてもその立場から見ていくことが必要になるだろう（稲葉 2019）。

(3)　アスペクトとは，場面の内的な時間構成を表す異なった仕方と定義されるもので，大きくは場面をひとまとまりとして捉える perfective と場面の内的な時間構造を述べる imperfective とに分けられる（Comrie 1976）。

(4)　古期インド・アーリヤ語は中期，近代インド・アーリヤ諸語に対して，古い文法を持っている言語のことである。パーリ語は中期インド・アーリヤ諸語に属する。

(5)　このことは Delbrück（1888: 278, 501–503）などにも記されている。また，Gotō（2000: 266 fn. 30）, 後藤 (2017: 56 fn. 31）には，ヴェーダ文献より後では，sma と直説法現在の共起が「繰り返し」を表さない場合にも用いられると言われている。なお，Speijer（1886: §326–327）は sma と直説法現在によって表されるものを歴史的現在と言っている。

(6)　つまり，パーリ語の経典では過去を指す ekaṃ samayaṃ「ある時」と現在形 viharati「過ごす」が一つの文であるため，過去が表される。一方，サンスクリット語の経典では ekasmiṃ samaye と viharati がそれぞれ別の文として解釈された。その結果「過去の繰り返し」を表すために sma が付加された，ということになる。

(7)　否定文では，パーリ語の否定辞をマークしなかった。

(8)　anterior とは，過去の事柄が基準点（発話時）に何らかの点で関係することを表す意味であり，パーフェクトや現在完了と呼ばれるものと同義である（Bybee, Perkins & Pagliuca 1994: 54, 61–63 など）。

(9)　参考までに，sudaṃ が現れる例文をあげておく。次の例は，遊行者マーガンディヤが自分の身体を指して健康と涅槃を示す場面である。身体を指すことを現在形 anomajjati「撫でる」（3 人称単数）が表している。直接話法の中の指示詞 idaṃ「これ」（中性主格単数）は，自分の身体を指しているはずである。身体を撫でて指し示しながら，ブッダに健康と涅槃を説明している状況が読みとれる。なお，本文の (20) でも sudaṃ が現在形の文に使われている。

M I 509 evaṃ vutte māgandiyo paribbājako sakān' eva **sudaṃ** gattāni pāṇinā anomajjati. idan taṃ bho gotama ārogyaṃ. idan taṃ nibbānaṃ. ahaṃ hi bho gotama etarahi arogo sukhī. na maṃ kiñci ābādhatī ti.「このように言われた時，遊行者マーガンディヤは自分の身体を手で撫でていた。『ゴータマ殿，これが健康である。これが涅槃である。というのも私は，ゴータマ殿，今，病気でなく，幸せだからである。何も私を苦しめていない』と言って」。

sudaṃ は過去形の文にも使われる。次の例では，sudaṃ が過去形 paṭibhaṃsu「現れた」とともに使われている。また，本文の例 (19) でも sudaṃ と過去形が一緒に現れている。

S I 136 api **ssudaṃ** bhagavantam imā acchariyā gāthāyo **paṭibhaṃsu** pubbe assutapubbā.「世尊に，これらのすばらしい詩が**現れた**，以前に聞いたことのない詩が」。

(10)　Bechert (1958: 57) ではこの例の典拠が “V 37.8” となっているが，“V 57.8” の誤植だろう。

(11)　同文が D II 99 にあるが，ここでは過去形 adhivāsesi が現在形 adhivāseti になっている。異読には過去形がある。